

## 雲帯の植生に就て (第1報)

### 南阿蘇岳雲帯の植生に就て

初 筆 住 彦  
黒 場 透  
末 滿 泉 治

我が国南部の山岳には樹幹、枝、地上等に極めて多い森林菌が認められる。この森林菌は一年中の大部分雲霧に包まれ従つて林内の湿度は常に高く着生植物の繁殖も極めて良好である。この森林菌は熱帯地方の山岳に見られる蘚林(Mossy forest)に類するもので筆者は之に雲帯なる名称を与えたいと思う。従来我国に於けるかゝる雲帯の森林に関する調査研究は多少あるが雲帯なる概念の下で研究されたものは殆どないものに記述する。雲帯の森林はかゝる独自の環境に成立したものであるからその施業に當つても特別に考慮する必要があると考える。以上の理由から筆者は先づ九州に於ける雲帯の森林(アカガシ林、モミ、ツガ林、スギ林、アナ林等)の調査研究を計画しその手初めとして南阿蘇岳、櫻島の調査を行つたが此處ではその中の南阿蘇岳の雲帯の植生に就き述べたい。

南阿蘇岳は鹿児島縣薩摩半島の南端に聳ゆる円錐状の死火山で頂上は海拔924米となっている。海拔700米附近に狭長な棚地が半月形に山の北半を圍繞して俗に鉢窪と称せられている。この700米以上の部分は有史以前に噴火により吹飛ばされ、その噴火口の中から粘度の高い熔岩を出し噴火口の大部分を充し更に高く積上つて現在の状態に達したものと考えられている。従つて700米以上は累々たる熔岩の塊からなつていてその風化も長年月を要するから最後の噴火から1091年を経ているが植生の連続も湿度は高いにも拘らず遅々として進んでいない。山頂附近の気温の観測はないが九州地方気温遞減率を用い山川、枕崎の気温から換算すると海拔900米の年平均気温は13.7度で本多博士の藪体林上部に相当している。又700米の気温は15度となる。植生の調査法は頂上の窪地(直径約120米)から北々東の急傾面に中5米長さ225米のベルトトランセクトを探り、更に下部のアカガシ林にては10米の方形区11個を探つて統計調査を行つた。その結果は鉢窪以上にイヌツゲ群叢及びユヅリハ群叢を、鉢窪以下(700~500米)にアカガシ群叢を認めることが出来た。只南斜面は直接海に面し暴風の衝路となることが多いのでアカガシ、ユヅリハ群叢はなくイヌツゲ群叢によつて占められている。尚暖風を受ける扇シヤリンバイ、トベラ等の海岸植物が外の斜面より頂上近くまで可成り侵入しているのが認められた。